

「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告（第1回）

「一緒にテーマを考えよう」

2011年6月14日 19:00～21:40 コミュニティセンター akta 出席者20名

■主催者あいさつ

公益財団法人エイズ予防財団の中村事業部長が、キャンペーンのテーマ策定に向け、東京（6/14）、大阪（6/21）で各1回、フォーラムを開くとともに API-Net でも意見公募を行っていることを報告。その成果をテーマ策定に反映し、8月には厚生労働省が「世界エイズデー」実施要綱に今年度テーマを盛り込んで各自治体等に通知するとの見通しを示した。

■冒頭報告「キャンペーンテーマとは何か」

公益財団法人エイズ予防財団の宮田一雄理事がフォーラムの趣旨、背景などを説明。

フォーラムはテーマを決める場ではなく、現場の意見をテーマ策定に反映するための機会と考えている。HIV/エイズの流行をどうとらえ、キャンペーンを現状に対応したものにするには、どんなメッセージが必要なのかといった議論を期待したい。配布資料1「世界エイズキャンペーン2005、およびその先」は2005年世界エイズキャンペーン（World AIDS Campaign）のテーマ「ストップエイズ。約束を果たそう」を決定した際の説明文書である。

世界エイズデーは1988年のエイズ対策世界保健大臣会議（ロンドン）で制定が決まり、同年12月1日が第1回世界エイズデーとなった。1996年には国連合同エイズ計画（UNAIDS）が発足、翌97年に通年のキャンペーンを推進するプロジェクトとしてUNAIDSが世界エイズキャンペーンをスタートさせている。

しかし、国連機関中心の世界キャンペーンでは、メッセージが各国、各地方の実情にそぐわない面もあることから、2004年に国際的 NGO/NPO の連合組織としての世界エイズキャンペーン（WAC）が創設され、UNAIDSはWACのプログラムを全面的に支援する役割を担うことになった。「だれが」「何を」行うのかというキャンペーンのあり方の大転換でもあった。

こうした動きを踏まえ、わが国でも遅ればせながら昨年、厚労省とエイズ予防財団がHIV/エイズ対策の現場を担う NGO/NPO 関係者との連携を深めるかたちでテーマを策定する試みを開始した。配布資料2「フォーラム『一緒に考えよう』」では、今年も昨年の成果を引き継ぎ、発展させていく方針が示されている。また、昨年の経験から

- (1) テーマは策定したが、キャンペーンの実施には結びつけられなかった
- (2) 議論の機会が東京だけに限定されていた

の2点が反省点としてあげられた。十分とはいええないものの、こうした試みを重ねることで、テーマの策定プロセスがHIV/エイズ分野の NGO/NPO と政府、自治体との連携協力推進の新たな基盤づくりにつながることも期待したい。

冒頭報告後、「他の人の発言を妨げない」「中傷や批判は行わない」といったディスカッションルールを確認し、質疑、および意見交換に入った。

ディスカッション1

以下のような意見が出された。

- ・世界レベルの話と国内の話は切り分けて考える必要がある。発生動向、性別、感染経路、セックスのことをオープンに話す土壌があるかどうかなど各国の状況は異なる。

《昨年のテーマ「続けよう～Keep the promise, Keep your life～」について》

- ・チラシ裏面（コンセプトシート）はよくよく読むと良いことが書かれているが、多くの人は読まない。テーマを届ける工夫がもうひとひねりほしい。
- ・セックスに関するメッセージが入っていない。HIV は性感染で広がるので、セックスのことを語りましょうという要素がほしい。
- ・少し言葉が多すぎる。読まなくてもメッセージが伝わる方法をもう少し工夫すべきだ。
- ・テーマを複数作成し、選択的に使う方法も、テーマと活用者の関係が近くなる。
- ・テーマと目標とメッセージは少しずつ異なる。目標は具体的な達成度がある程度測れるもの。テーマは最大公約数的。メッセージは更にまた別だ。HIV の課題は基本的に大量に伝えるのではなく、個人間で手渡しして伝えるものではないか。大まかなテーマを発信するのか、日本の状況を踏まえ対象を決めて発信するのか、整理が必要だ。
- ・目標とテーマとメッセージの話は興味深い。現状でどこを優先するのか。

【話題提供】

10 分間の休憩後、akta、ふれいす東京の活動に携わる参加者 2 人から、話題提供として短い報告が行われた。

・話題提供 1 コミュニティセンターakta は 2003 年 9 月開設。今年 4 月に運営団体が移行し、非営利団体 akta が発足した。戦略研究の成果を最近感じる。2005 年当時の akta 来場者は 20～30 代のゲイ男性がほとんどだったが、最近は 50～70 代や 10 代にも年齢層が広がり、ゲイ男性以外にも多様な性的指向の人が訪れている。精神保健や薬物使用が身近な問題になっていることも感じる。テーマのターゲットに関しては、日本の現状を考えると感染報告の比率が圧倒的に高い MSM やその周囲の人にメッセージが伝わるのが大切ではないか。

・話題提供 2 陽性告知後 6 ヶ月以内の人たちのグループミーティングやウェブサイト「HIV マップ」の作成を通じ感じたことを話す。陽性告知後にも長い人生が待っている。それぞれの人生に沿ったかたちで HIV を抱えることで、さまざまなニーズが高まってくる。告知直後、および長期療養の疲れに対応する必要がある。検査のみを促すメッセージが上から降りてくることが多いが、その結果を受けて当事者である受検者はどうなったのか。エイズ発生動向からは見えてこない。

陽性告知から始まる生活のスタート支援は重要だ。グループ・ミーティングの参加者のアンケート調査では「似た境遇の人に会い安堵感を得た」「自分と異なる状況を知り客観性を得た」

「病気のイメージが変化した」などとの回答が多く見られる。心が揺らいだときに伝わるよう、分かりやすい場所で、分かりやすいメッセージが用意されている必要がある。

検査と予防と支援は異なる分野ではなく、検査を受けた当事者、告知を受けた当事者にとってはすべて「地続き」である。陽性告知後の支援経験から、HIV 検査はゴールではなくスタートだということを常々感じている。近年の傾向として、より良いスタートを切れずにいる人が多くいる。原因は HIV 感染だけでなく、プラスして何か（セクシャリティ、人間関係、国籍、ドラッグなど）が存在する。非常に若い人、あるいは年齢層の高い人たちもまた脆弱さを重ね持つてと言える。、難しい問題を抱えているケースもあり、以前よりも支援は難しくなった印象がある。予防・検査から支援の連続性がより重要になっているのではないか。

ディスカッション2

- HIV に感染して長く生きることは、生活上の多様な課題に対応しなければならないということでもある。エイズ対策の中で、その辺をきちっと表現しなければならない。
- 社会的脆弱性のある人口層にメッセージを届けるのなら、その人口層との連帯やつながりをどうするか。一方で HIV に感染していない人へのメッセージはどうするのか。キャンペーンテーマを考えるのなら両者を分けて考えるべきでは。
- どのタイミングで出すメッセージなのかを同時に考える必要がある。禁煙も同様である。
- 世界のテーマを見ると、今年はこれ（男性、女性、人権・・・）と順繰りに取り組んでいる。
- 新規感染報告の約 7 割が MSM で占められる現状の中で、MSM を支援する対策がいま必要だということに理解を得られる一般向けメッセージが大切ではないか。
- キャンペーンで HIV がゲイの間で流行していることを広く伝えるには、HIV/エイズがゲイだけの問題として切り捨てられないことがないよう気をつけるべきだ。エイズよりもむしろセクシャルマイノリティーに焦点を当てた方が伝わりやすいのではないか。
- HIV/エイズに取り組むことは、さまざまな現象に関心を広げる潜在力があるのではないか。
- 昨年のフォーラムでは、テーマはおさまりの良い言葉ではなく、ひっかかりがある方がよいという意見も出た。本当にそうなの？という疑問が関心につながる。結論を出すための議論ではなく、プロセスを共有し考える議論が大切だ。一般向けのテーマやポスターを作るのなら、異性間だけを扱い MSM の存在が想像できないようなものは避けてほしい。
- HIV に関心のある人を対象にするのか、それとも無関心な人が対象なのか。
- 日本のポスターやキャンペーンテーマは、メッセージの中に「性」が入っていないことが多い。HIV はセックスで感染することが多いはず。
- セックスの話を抜きにしてコンドームが大切と呼びかけるのはおかしい。メタボを語れば食事や運動の話が出てくるのに、HIV を語ろうとしてセックスの話がなくなるのはなぜか。

再び《昨年度のテーマ「続けよう～Keep the promise, Keep your life～」について

- HAART 登場から 15 年経っても HIV/エイズに対する世の中の理解は変わっていない。陽性者からみれば差別や偏見はあちこちにあり、それとどう闘い、隠し、避けて通るかを考えている。だからこそ「続けよう」という言葉が出てきたはずなのに、それを 1 年で止めるのか。毎年付け焼刃的に新たなテーマを設けるのが決してよいとは思わない。10 年後はもっと

HIV 陽性者に理解のある社会となり、受け入れが進んでいたらよい。国や財団が目指すのはそこではないか。テーマは10年、15年先を見据えたものを設定してほしい。

- ・前年度は文字が多過ぎたので今年はサブをもう少し絞っていくのも一案。大きな枠組みの中に幾つもの考え方があれば、それを基にコミュニティーが変化を加えていこう。「続けよう」のチラシ裏面を見ると6項目もある。例えば今年はその中から2~3項目だけにすればよい。長い視野と大きい枠組みが必要だ。
- ・「続けよう」はテーマであって表現ではない。チラシの裏面はコンセプトシートだと思った方がよい。それらの表現は、ポスターなど別のかたちで行わなければならない。
- ・各方面をおさえたのだと思う。行政向け、一般向け、陽性者向け、支援者向け。1枚におさめずカード6枚に切り離してもよい。項目の順番を変えただけでも雰囲気は変わる。
- ・「続けよう」はセックスのことに一言も触れていない。セックスをしないとうつらない病気なので、「セックスを続けよう」と入れるべき。
- ・チラシを読んでいくとなるほどと思う。ただし、読んでもセックスの際の行動変容にはつながらない。短いキャッチフレーズやロゴでもいいので、セックスに結びつく言葉を入れるべきだ。予算がないのなら、12月のイベントやパーティーでテーマを使ってもらい、こちらが予算を出さなくてもすむようなアプローチも必要だろう。
- ・「10年間続けよう」は強いメッセージ。毎年変わることなく、地続きになっているテーマがないと、関わろうとしても関われない。
- ・10年間このテーマでいくので、各地域あるいは各団体でこのテーマを入れてキャンペーンをしてください、としたらよいのでは。ある程度のスパンを設けたほうがよいと思う。
- ・「続けよう」は大きな言葉で、何を続けるのかによって意味が変わっていく。しかし生きていくことは続いていることなので、大前提として使える。このテーマを10年続けられる日本があるなら素敵なことだ。ただし、「続ける」の意味がどう捉えられるのか、危惧もある。
- ・最終的には関心を持ち続けようということではないか。他の人に関心を持たず、半径が狭い中で生きる現代社会。人は可視化されないと関心が向かない面もある。関心を持ち続けてもらうためのメッセージが何か作れたらよいと思う。
- ・「続けよう」のテーマが無関心の現状維持にはならないだろうか。
- ・医科大学でもHIVとエイズの違いを理解していない学生が多い。HIVとゲイが結びつかない大学生も多い。先程のチラシを教育ツールとして使うのなら、メッセージ部分をもう少し減らし、基礎知識を盛り込んだらどうか。セックスをするとこの病気になると認識しながら、そこにHIVというウイルスの存在があることを理解していない若者もいる。
- ・マスメディアに関心を持ってもらうようテーマや手法を工夫したらどうか。
- ・テーマと表現は切り分けて考えたい。そのテーマを自分ならどう表現するか。例えばこの会場の20名がその標語を使って自分なりのポスターを作る。それを20mぐらいのところに貼れば、前を通る人は20名の展開例を見る。それはすでにキャンペーンだ。
- ・API-Netへの応募も是非お願いしたい。キャンペーンテーマの案だけでなく、それをどう表現するかもご意見いただきたい。